

148

357

演劇脚本

嵯峨奥妖猫奇談 上の巻

萬石取茶入墨附 下の巻

版權所有
發行

088560-000-7

特52-577

嵯峨奥妖猫奇談 上の巻・萬石取茶入墨附 下の巻

竹柴 金作 / 著

M27

DBJ-0219



嵯峨奥妖猫奇談

序幕 祇園社茶店の場

重藏寺邸の場

- 一 重藏寺又八郎
- 一 同養子藤三郎

浪人並神童藏

- 一 下女おなべ
- 一 酒屋の丁稚
- 一 參詣人
- 一同
- 一同
- 一同

- 一 重藏寺の若徒彌平次
- 一 茶屋女祇園のお勝
- 一同妹分小せん



中問此助 茶見世のおれん 一面の平舞臺 中に額堂下手出茶屋都て祇園境内茶店の体茲に茶見世のおれん參詣

御客様とて行ゆでムリ升(軍)とこでも能は一所に付て參れト舞臺へ來り床几へ掛る

(れん)ヲ、立神さんに横田さん大ろふ御機嫌でムリ升(軍)其御機嫌直しに一抔呑むつも
りて上酒を一升提て參つた(れ)今日は小せんが居り升せんからならふ事あら外へ行て召上
つて下さい升(丁)是は酒の代もろんのんだト丁稚は向へ逃ては入る(軍)彼是申して居た

故丁稚めを逃して仕舞た(伴)よくも我々を断つたナ此返報はきつと致すぞト兩人立腹して上手へは入るおれんは塩花を蒔く是を大柏子流行唄になり向より小せん茶屋娘の持へ藤三郎酒に酔たこなき跡よりかかつ茶屋女の持へにて附て出て来り(かつ)モシ若旦那のみ足がひよろ付升から御浮雲うムり升マア兎も角も若旦那を見世へおつれ申なさんせト皆々舞臺へ来る(れ)チャ若旦那大ろうれ早うムり升たナ(藤)おれんは一人留守番で淋しがて居るだらふとろなたの好きな新芋の煮ころばしを持って参つた(れ)夫れは有難ふムり升私しは唐茄子やおさつより大好物ドレ頂戴致し升ふ(せん)もし若旦那あなたがそうやつて入らつしやては人目に立て悪ひから殺責の影で御休息なさり升せ(藤)イヤ／＼究屈な所へ参るより此方ダけつこのん氣よい構わぬがよい／＼ト烟草盆を枕に寝る(せん)夫では私しが困り升若旦那／＼(かつ)モシおれんさん今日はまだお参りしなうつたから此間に天王様へお参りをして来よふじやないか(れ)お参りよりは此お芋を早速お茶受にたべたふムんす(かつ)おまへも察しのわるい一所にお参りに行かしやんせへナ(れ)なる程一所に参り升ふトおれんおかつは上手へは入る(せん)モシ若旦那／＼一寸起て下さんせ(藤)コリヤ小せん一人置て二人は何れへ参つたのじや(せん)二人の衆は今の内お参りに行たのじやわいなア(藤)若イに似合わぬ信心者じやナト小せん何たりを見廻し(小せん)モシ若旦那あなたはあなぶりなさるのでムり升か(藤)ナニおぬしをなぶるとは(せん)あなたのお目から見るとはそりや

モウ賤しい茶屋女比べものにはなりませんが浮氣家業はして居れどついに是まで一度でも男に肌は穢し升せぬは此山で誰一人り知らぬ者のない私し故あきたの様なお方ならせめて女房にならずともお妾にでもなりたいと思ふ心も届いてか此程よりして嬉しいれ詞ほんの座輿のお戯れにおつしやるのかは存じ升せぬが私しや誠と思ひ升して明暮樂しみおして居り升ダ口先斗りで一度でも眞庭からのお情けを受た證據がムり升せぬ故わたしや氣が揉てなり升せぬ(藤)ハテ女といふものは疑ひ深ひ者じやナ身不肖ながら重藏寺の養子といわれ藤三郎何故あつて虚言を構へ人を惑わす所存はなしそちをあぶるの何ぞといふそふ言ふ心はさら／＼ない仮令身分が賤しからふが貴人高家の娘で有ふが戀に上下の隔てはなく懸想致すに替りが有ふや心に叶つたそなた故身共の妻に致したいと遠から思を懸たるも念が届ひてそちらでも身共の様な武骨ものを彼是申てくれるといふも是皆月下氷人の赤繩に相違なし仮令枕はかわさずとも番ひし詞に二言とない必ず心をうつしてくれまいぞ(せん)あなたは左様お仰しやれと誓ひの證據がムり升せぬ故案じられてなり升せぬ(藤)ハテ扱そちも疑ひ深ひ然らば如何致せばよいのじや(せん)私しの方でもおまへさんに證據の品を上升からあわたの方でも私しへなんぞ證據を下さいまし(藤)然らば身共が養父より譲り受たる此印籠誓ひの證據に遣わそふ(せん)そんならわたしもか／＼さんダ筐に遣した此かんどし是を證據お上升ふト兩人件の品を懐ろへ入れるト此以前より彌平次若徒のゐり以前のおかつ

おれんも出て来り(彌)若旦那様是にお出かされ升たか(藤)ヲ、そちや彌平次(彌)コリヤ拙者が申し上た御異見御用ひなされて下さり升せぬナ(藤)何異見を用ひぬとは(彌)改め申すに及び升せぬぞ先頃よりして拙者めが影になり日向になりさま／＼御異見申升ももんあわたの御身の爲あなた様には誰有ふ浪嶋家で人も知つたる田上の御二男拙者乃主人重藏寺の大旦那様々御懇望ふてお五ツの年重藏寺へ御養子に御出なされ十三年の其間文武二道は申に及ばず香花茶の湯歌俳偕御遊藝に至るまで御養父様の御丹精適れ名家の家督お御立なされん養父の御見込大切なる御身の上にていつの程には御心乱れあらふ事か茶屋女に○イヤサ遊里へ立入り遊すとは何たる事でムリ升かよふな事を家來の身よて申升のもあなたの御爲不禮慮外を顧ず御異見を申升る今日までの此仕未は決して口外致し升ぬから只今迄の御放埒は御止なされて下さり升せ(藤)イヤ何事かと思ふたら長々しい其異見改心致すと申したいが是斗りはあきらめられぬ併し折角其方がわざ／＼是迄仰ひに來れば歸宅をせぬも本意でない其方が顔を立て身共は直お立歸ればうちも跡から早く參れ(せん)夫ではあなた是なりに(れ)モウ御歸りでムリ升か(せん)マア宜敷ではムリ升せんか(かつ)御身の爲と聞からの惡止しては惡ひわいな(彌)又こなた衆もわしの主人に惚れてくれたが憐めしいわへ(れ)夫でも元はあまへさんがトいふを打消して(せん)矢張私しが惡ひわいな(藤)女のよれる黒髪には大象すらも驚る譬へ戀と情よからまれては(彌)夫程までにあなたには(藤)

此道斗りは捨られぬわへト唄になり藤三郎向ふへい入る彌平次ニツコリ思入有て(彌)どふ／＼こつちの思ふ坪若旦那もよつばと御意に叶つた様子はでこつちも安心だ(かつ)モシ彌平次さんとやら御異見あされたあまへさんが此小せんさんが若旦那に惚れてムるを安心とはどふいふ譯でムリ升(彌)今安心といつたのは何を隠るふこふ言譯だアノ若旦那は變人故義理ある中の御養父が殊の外なる御心配物にこつては體にさわり病わづらいをしてはあらぬと都名所をを講所方／＼あつこつちと連歩行とふ／＼祇園の小せん坊へ札が落れば大安心四の五のあしの御新造様おかしな事を聞様だがまだお情けに預うらぬへか(せん)夫れに付ても彌平次さんお情けこそ預からぬと若旦那よりしつかつとした証據ものを貰ひ升た(彌)ナニ証據ものを貰つたとはト小せん印籠を出し(せん)此印籠をお貰ひ申しわたしの方から簪しをおあづけ申して置たればわたしは是で安心し升ぬ(彌)夫は何より能証據捧ういふものがあるからは是うら直に押かけて御新造様になるが能ひ(せん)どふしてよいやら惡ひやら姉さん智恵を貸なさんせ(かつ)其色狂ひをかこ付けに根もあき事を尾に尾を付けもしやあなたを押し込めに(彌)ヤア(かつ)イさ押付智恵をト床几へかけるを木の影から貸そふわいなアト大拍子流行唄よて道具廻る

本舞臺三間の中足の二重庭前楓の立木正面建仁寺能き所に紅葉の立木都て重藏寺邸宅の体爰に仲間と下女組討をして居る此見得合方調べにて道具治る

ト上手障子家邸の中へ重藏寺又八郎出て来り(又八)コリヤ／＼ちつと静に致さぬか(おなべ)大旦那様私しは口惜くつて／＼なり升せぬ(又)何が其様に口惜いのだ(なべ)此丸助めが私しの事を大道白を見る様だと申升故二度と再び言わぬ様組伏せて遣らふと思えば丸助めの馬鹿力で剣返されこんな口惜しい事はムリ升せぬ(又)何もそんなに泣くおは及ばぬ又丸助も丸助だ左様な悪口は申さぬがよい(丸)あんまり見事でムリ升故立派なものだと譽升したが決して悪くは申し升せぬ(又)ハテ扱口のへらぬ奴だ用ダ濟だら部屋へ参り休息致せ(丸)ドレ部屋へ引取り升ふ(又)鍋も仕かけた用でも致して仕まへ(なべ)ハアイト兩人よろしくは入ト引違へて以前の藤三郎出て来り(藤)父上只今歸り升てムリ升(又)彌平次を迎ひにやりしに扱は道にて行逢しか(藤)祇園の社の茶店にて出合升てムリ升が一足先へ拙者めは立歸り升てムリ升(又)祇園の社内は當節は定めて紅葉の盛りで有ふが處／＼遊覽致したかな(藤)仰せの如く彼ら社内は錦色なす眞盛り夕日照添風景は高雄立田にたさ／＼劣らぬよい景色でムリ升(又)定めし左ころと思わるゝ扱藤三郎改め申に及ばぬぞ知ての通り我家は客ながら五百石浪鳴家より貰ひ居ればまさかの時には御馬前にて報ひをせねばあらぬ身の上夫故にこそ其方にも抑幼年の砌りより武術の道をはげまし置たり必らず夫を忘却なし飯初にも心を速てし蹈迷つては成升せぬぞ(藤)夫故拙者も身を慎しみ幼年よりの御丹精心魂にてつし有がたく寝た間も忘れは仕らぬ(又)そうあふてそ叶わぬ事今宵は二男又七郎の

眼病平愈を祈りの爲め／＼と諸共峯の薬師へ通夜ながら參籠に行淋しい徒然の折からそちの居るこそ調度幸ひ圍碁の相手をしてくりやれ(藤)エ、(又)なぜ其様に驚くのじや(藤)イエ驚きは致し升ぬが又夜通しにイエまた夜と共に負通すが今から閉口致し升(又)老眼故につい見落し先夜も三番程立つ、けに負し居つた意趣がへし今宵はどふか勝を取り先夜の敵きをどらねばならぬ(藤)然らば仰せに任せまして御手合せを致し升ふト唄になり又八郎藤三郎上手の障子屋体と入る向ふより以前の彌平次先に小せんおれん出て来り(彌)御支關へ廻ると人目が有てわるいからわざ／＼こつちへ連れて來たのだわしが能様に取なしてやるから氣を揉まずに待がいひ(せん)賤しい身にて押付業モンお叱りでも受升てはと氣おくれがしてなり升せぬ(れ)サア／＼早く行升ふト三人舞臺へ來て(彌)チイおなべどんは居るかおなべどん／＼ト奥よりおなべ出て来り(なべ)チ、彌平次どんお歸りか(彌)若旦那もふお歸りかな(なべ)ハイ今し方お歸りなさり升たシテ其お女中わ(彌)此女中と若旦那が夫婦約束までしてあるので押かけ嫁に來なすつたのよ(なべ)エ、モじれつたいどふとも勝手にしたがよいト上手障子家体の内へは入る(彌)訝ふ焼餅を焼きヤアがるト皆々枝折戸の内へは入る此時上手にて(又)何彌平次が戻りしとナト奥より以前の又八郎出て(又)チ、彌平次戻つたか太義であつたついに見別れぬ二人の女彌平次夫は何ものだ(彌)へイ是は若旦那様の隠し妻でムリ升(又)何と申す(彌)都見物を遊ばすどて祇園清水智恩院諸所方々とお

あるきの果は斯様な美しい馴染の女中がいつか出来度々御異見申升たが夫を返つてお怒り被成れ今日なぞもお一人で祇園へお出掛被成れ升て御休息の其折から計らず拙者が御目に掛り跡へ残つて段々と様子を聞けば若旦那と二世を掛たる約束が致して有ると聞て恟り小身なら知らぬ事お家柄なる御當家の御養子様の御新造にあされ升る女をば茶店へ出して置升てはお家の耻と存升て一所に連れて参り升た(又)扱々夫は怪しからぬコリヤ打捨ては置れぬ事コリヤ彌平次藤三郎を呼で参れト此時上手にて(藤)只今夫へ参り升るト藤三郎出て貳重下手へ住ふ(又)コリヤ悴其方あれなる茶見世の娘と証據まで取かわし二世の契約致せしか(藤)父上のお耳に入り面目次第もムリ升せぬがお耳に入し上からは何を隠し申し升ふあれなる小せんの色香に迷ひ二世の契約致し升した(又)そんならいよト思入有て彌平次わざとさつきとなりて(彌)モシ若旦那常々拙者が御意見を申升のも爰の所仮令御世繼惣領でも女狂ひにお心乱れよからぬ噂さの浪島家へ聞へ升てお家の爲には替られず余義なくおあなたのお身持を御實家の旦那様へ御相談をなさらにやならぬエト臆甲斐ないお方じやナア(藤)其異見忝けないが當家へ養子に参るといへど又七郎が出産なさば家督も立たん所存はなし我まゝ氣隨と父上様平にお免し被下れ升せ(又)イヤ又七郎があればとて浪島侯の御前に於て田上氏方某が懇望いたして貰ひし其方心に叶ひし嫁とあれば何此方にて否哉を言わふそちに娶合せ遣わさん(藤)エト拙者が不埒をお叱りなく(彌)アノお詞を聞たので小せ

んどのは何よりか嬉しい事有ふナア(せん)嬉しうなふてあんど仕升ふコリヤ夢ではないかいナアト此以前向ふよりおかつ出て来り枝折戸の外に聞て居て此時前へ出て(うつ)其縁談は故障といわねばなり升せぬ(藤)誰かと思へば祇園のおかつ(彌)扱は様子を聞て居たか(かつ)御大家様のお屋敷へ御案内も願わずに憚り多くはムリ升れど妹分の小せんさんの歸りの遅ひに案じられ出掛て來升たお庭口思わす立聞く此場の御様子には何ぞ入組んだ深い様子がなければならぬたどへこちらの若旦那が御執心でムリ升ても妹分の小せんさんが死ぬ程惚れて居り升ても生々木を割いて私が連れて歸らにやなり升せぬ(又)コリヤト女今承われば其方は異な事を申したが余の義は格別深い様子トヤ事は聞捨ならぬ其一言仔細あらば申して見よ(かつ)どなたの前でもべらト臆面もなく申升のも女の徳失禮も願ひませず申升ふ(彌)茶店の客を扱ふとはちつと違つたお邸中余慶な事は申まいぞ(かつ)余慶な事は申し升せぬ筋道丈は申し升る私し事は祇園の社内へ茶見世を出し升出過もの以前の事は存じ升せぬが小せんさんと若旦那とそも馴染の初めといふはそれにお出の彌平次さん小せんさんの所へ来て大旦那様の御頼故若旦那を小せんさんに唆かしてくれる様にト言かけるを(彌)コリヤトお勝何を申す身共一向存せぬ事だ二言と申さば免さぬぞト立懸るを(又)彌平次扣へぬか虚言か實事は跡にてわかる扣へ居らぬか(彌)ヘイト扣へる(かつ)只今申したお頼も誠とあつて小せんさん若旦那より大逆上幾瀬の思ひで御印籠を替らぬ

證據と御貰ひ申し是で安心仕升たと私しへ見せて惚氣升のを異見を致して居る傍から彌平次さん々油をかけ否應なしに若旦那を科人にするお斗らひ(彌)コリヤおかつ言わして置ばさほくゝなる口先任せの放題よくも工んで參つたナト立かゝるを又八郎思入有てわざときつとなり(又)彌平次夫へ出イ扱は汝が猿智恵にて藤三郎に身を持崩させ又七郎に跡目を取らせん忠義立よしなき工を致せしよナ此場の面晴悴へ言譯于討ふ致す夫へ直れ(藤)アイヤ父上暫く御待下さり升せ忠義を盡す此彌平次元より拙者も又七郎に跡目を譲る心底故毛頭恨みはムり升せぬ(又)夫じやといふて(藤)何事も拙者に御任せ下さり升せ(彌)申譯なき不調法平に御免し被下り升せ(かつ)長居をしては却つて恐れ小せんさんちつとも早を歸らふわいなア(せん)そんなら最早是切に(かつ)左様なれば旦那様(せん)是で御暇致し升るトおかつ小せんおれん向ふへは入る(藤)今宵は母も弟も峯の樂師へ參籠致し御休息の其析からあらぬ事をお耳にふれ嘸御氣憐でムり升ふイヤ父上には御寝なり遊し升せ(又)此頃は疳癖募り枕に付けば目がさへて病の業にて眠られず幸ひ今宵は留守の事其方を相手に一石圍ふ(藤)然らば御相手致し升ふト兩人上手へは入る(彌)何の事だへとふゝ化が顯れかゝつた大旦那の御頼み故甘くやらふと思つたによもやあゝした馬鹿律義な茶屋女じやア有るめへと大事を明した此身のあやまりコリヤ思案をト二重へ腰をかけるを木の頭せにやアならぬト此摸様よろしく道具廻る

本舞臺一面の平舞臺上の方折まわしぬり骨の障子正面襖床の間をぞ都て重藏寺邸居間の体丸行燈を置き真中に碁盤をすへ下手に藤三郎上手に又八郎住居本調子の合方にて道具止る(藤)未熟の手並も願ずお相手致すでムり升ふ(又)今晚は圍碁の勝負は表向き其内實ならべ置く二ツの碁笥に入れたる石黑白共に其方があいさつ聞ねばならぬ(藤)何とおつしやる(又)改め申すに及ばど我重藏寺の家柄は此嵯峨山を代々領し連綿たる名家なりしが過つる征夷の戦争に多病によつて出陣なさず武將の命に應せざりしが瑕瑾となりて領地を上られ附屬の家たる浪島に嵯峨の領地を奪われしは先祖の耻辱此上なしと無念は年月忘れがとく折こそあらばよりゝに徒黨をかたらひ謀叛の企元の領地に復さんと明暮忘と暇もなく心を碎く折も折御身を先年養子になせしは浪島譜代の老臣さる田上刑部を味方に語合ふ手術の一ツト窺かに悦び夫となく心の底を探り見れど中々以手堅き刑部所詮加胆を致すまじとあきらめし故實の所は御身をも離別なさんと存せしが思へば一旦我家の家督も立んと誓ひしものを離別致すも本意にあらず何卒當家の無念を受繼我に加胆を致せし上實父の縁に刑部殿へ其方よりして申入れ一味に引入れ呉まいか(藤)イヤ勘考迄もなく父上御本心でムり升るか(又)何で虚言を申そうぞ(藤)此義斗りは某しは押して御意見申上り升嘴青き身を以て申も憚りムり升れど抑當家の御先祖が御多病故出陣に應せざりしは武門の耻辱夫に引かへ浪島家は附屬といへど勢をくり出し彼の地に於て拔群の働きなされしこそ此嵯峨山の城主に

中へ血汐か大そう染込でどふ洗つても取れぬ故漆で四方を塗まわし時給をした故買人が付
 つい此間賣れ升えた(雲)捲うして賣と先の相人は(久)何を隠ろう浪島の御殿へ先頃賣升し
 すが先が先故今となり買戻して来るわけにも行かず買はお寺の事だからどうぞ未來と思つ
 て下せ(雲)そう言う事なら久兵衛さん(西)方丈様へはなして下さい(久)知らずに買つた
 碁盤故どこがどこまで出た上で白い黒ひの言譯仕升うト三人門の中へは入るト門の中が前
 まくのおりつ小せんおれん寺参りふ來たる心にて出て來り(かつ)月日の立の早ものでッ
 イ昨日今日の様と思つたももふ三年のお寺参り是から七年の年回までは三四年も間があれ
 ば小せんさんも爰いらで若且那の事は思切り能御亭主でも持氣になり茶店の足を洗ふが能
 ぞへ(小せん)商賣柄にも似合ない野暮なものだと姉さんが定めてお笑ひなさい升ふがわ
 しや生涯一人身で暮す心で居り升から亭主なんぞは持升せんよ(かつ)併してふして只の一
 度枕かわさぬ其人よ女の情を立通し一週忌から三年までお寺参りをするといふは商賣柄に
 は珍らしい堅ひ心の小せんさん(せん)替りものだとおかつ姉さん必らず笑つて下さんすナ
 (れん)ほんにわとしが男ならこう言ふ女に惚れとふんすホ、(かつ)ドレ内の人に叱
 られぬ内ちつとも早く歸り升ふト三人行にかゝる門の内より田上刑部更たる侍まで出て來
 り(刑)アイヤ女中衆お待下され(かつ)あなたは今方お墓場でお目う、つたお侍様(刑)如何
 にも墓場で出合しものお身達が墓參せし藤三郎が實父てゐる昨年といひ今日も早ら墓所

よて面會致すが實の親たる身共の外現在養家の者ですら參詣いさぬわの墓へ參つて下さ
 る御身達は何ぞ由縁がムつてかお聞申すも佛へ追善譚をお晰し被下れ(かつ)是はく見
 る影もあい私共を御懇にお尋ね被下れお耻かし存じ升何を隠し申升ふ私共は祇園社内に茶
 見世を出して居り升る賤しい者でムり升が重藏寺様の若且那が祇園の社へ御出の節此子が
 御見初申升てあゝいふ御客が此見世へ御寄被成れ升ればこちらから御茶位は達引ても思
 つと念が届いてか一度々二度と御立寄にて一ッ寝こそ致し升ねど口約束の御戯れに見世を
 引せて御新造に持てやると迄おつしやつとをこちらに誠と思ひ詰め女心の淺はかにも重藏
 寺様の御屋敷へ忍で參つて段々御邸の御様子伺へば大且那様が御實子を家督に立た
 思召しで何かの罪を御養子に拵へんといふおもくろみで彌平次といふ御家來に内々言附此
 子をだまして押掛嫁に入込せ夫を落度度若且那を押込めやうとなされとをはやくもさとり
 私しが工みの底を割升て立歸り升て其晩お思ひ掛ないあの騒動(せん)影で御様子聞升ても
 おいたわしいは若且那舅殺しの悪名に人の譏りを御受なさるも元といへば此身から起りし
 事と思へども身分違ひの私共仕よふもよふもムり升せぬせめて御墓へ香花でも御手向申
 して御回向を致し升ふと姉さんや此おれんさんをさそいまして(刑)夫でわかりし忤が不所
 存そうとは知らず日頃より慎み深き者なるにいかなる天魔が魅入りしかと短慮を恨み居つ
 たるに思ひ掛なき御身等より斯る次第を承ねるは草葉の影にて忤の導き左は去ながら小せ

んどやらよしなき忤に操を立ず似合相應縁あらば其身をかため一生の無事を斗るが肝要じやぞ(かつ)有難ひ其御諭し此御異見で小せんさんも少は心が解升ふ(刑)シテ連立し其方は何れに住居いたされるナ(かつ)私事は三年跡祇園の店を引升て今では浪嶋の御屋敷へ御出入致す彌太郎と申左官の女房ふなり升てツイ此先に居り升る(刑)扱は彌太郎の妻ふてありしか(かつ)あなとは内の人を御存でムリ升るか(刑)屋敷へ出入の左官故そなとの夫トは見知て居る何れ近日彌太郎の宅へ尋ねて参るで有ふ(かつ)左様なれば且那樣(刑)奇特の佛參過分でムるぞト刑部向ふへは入る(かつ)思わぬ事で大きにひま入りトレ急いで参り升ふト行かける爰へ上手より左官の彌太郎重吉出て(彌)歸るなら一所又歸らふ(かつ)あまへはこちの彌太郎さん(重)姉御が今日の寺参りはてつきり芝居か義太夫かと兄貴がわるく考操て出掛て來たも小せんさんが見上た心に姉御までつき合て來た寺参りと知れて兄貴の機嫌も直り是で私も安心した(せん)モン姉さんアノ叔方はへ(かつ)名古屋へ行た親方の同じ子分の兄弟々子重さんといわしやんすこちの人の弟分さ(せん)テモ重藏寺の若旦那によく似たあ方でムんすナア(彌)てう度こつちの重吉もアノ小影から小せんさんの嘶を聞たり顔を見たり迎も男に産れたらあゝ言ふ女を女房にといわねへ斗りに氣のある様子已れが一番世話をするからなんと夫婦になる氣はねへか(重)兄貴何分お頼申升(かつ)成程是は重吉さんにはよい釣合の夫婦でムんす(せん)さふでも私しや姉さん次第になり升わいなア(彌)コイツ

アどふかまどまりさうだ(かつ)こうして見るとお寺参りが(れん)さうか見合ふなりそふだわいなアト流行唄よて皆々向へは入る跡門の内より以前の久兵衛を役僧呑念退りけて出て來り(呑念)コレサ久兵衛さんイヤ道久さん辻さぬぞ(久)エ、蒼蠅呑念さん放しなせへナ呑めつたにはなさぬ三分で賣たあの碁盤五十兩に賣れたと聞てはせめて二割の分ケ口をこつちへ貰わにやけふりらして梵天國の此呑念どんな難義を仕様とも傘一本の外は頼よる所なき此身の上さア(久)分れを出しとり(久)夫アヤあまへから買た時は僅う三分の碁盤だが去年の暮から貳年越し店の棚へ上て置き血汐お染つと四方面の空目と漆で塗潰し金の蒔繪を掛るまでは並大体の事じやアねへ其丹誠で浪島様へ五十兩で賣たのはいわばこつちの商賣冥利買は安いが高蒔繪の牡丹にめつ法か(久)碁盤おまへに別れをやる様なそんな因縁は少しもない(呑)イヤ(久)夫は人情のないといふもの不思議と名の付く手品でも種がなければ遣へぬ道理貳割が出来ずせめて一割さア(久)こつちへよこした(久)此寺お居あさりやア二朱や壹分とやりも仕様ダ門前拂ひの宿をし坊主義利も糸爪もいるものか(呑)人の落目を附込んでそふ因業よ出掛れば又こつちにも仕様があるぞ(久)仕様があるなら勝手にしなせへ(呑)けふからしてと傘の破れかぶれた覺悟しろ(久)エ、何をしやアがるト兩人立廻トド久兵衛の呑念の横腹を蹴る呑念悶絶する是にて久兵衛向ふへは入る茲へ下手かさしがねの猫一疋出て來り呑念の天窓をなめる是にて呑念は起上り魔さしたる思入に

て亡者の踊りよろしく有て猫付て門の内へは入る向より重藏寺の後家お藤重藏寺又七郎お主かつら盲人の拵へ跡より前幕の彌平次下女お鍋付添出て來り少し跡より關傳六郎足早に舞臺へ來り(傳六郎)アイヤそれへお出なさるゝ重藏寺の御親子ならずや(ふぢ)あなたは御近習頭の關傳六郎様(彌平次)お見受申せば只れ一人されへお越でムり升(傳)只今拙者尊宅へ殿の使者も參りし所御佛參と承りお跡を慕ひ參つてムる(又七)何殿様よりお使者とナ(傳)扱又七郎殿一別以來其後と御意得申さぬが實に光陰に關守あくイヤ早ひものでムる三年前御親父の御最期御愁傷の程お察し申す(ふぢ)何は格別お使者とあれば院内にて承わるでム升ふ(傳)イヤ拙者はまだ外に君命請し用事もムれば是にて御意を申入れ直くお別れ申したし(又)シテ大守様の御用とは(ふぢ)如何なるれ使者おムり升(傳)役目でムれば御免被下れト上へ通り使者の趣き余の義にあらず先頃よりして我君おは圍碁をお好みなされども拙者を初め近習のめんくいづれも御前お及ざる故お相人になる者もなくと有て重役老臣をお召寄せにてお圍あるも余りと申せば事くしく殿のお相手に召さるゝものは誰かれならんとお撰の上重藏寺又七郎どのなれば流石親父又八郎どのが幼年よりお仕込扱今盲目にあられても圍碁は達者と申事は屈竟のよき相人と近頃御苦勞至極ながら御出仕之職を拙者より申參れと則誠意此職御承引被下れ(ふぢ)何事のお使者かと實は心をいため升たが圍碁のお相人でムり升トナ是ぞと申す勤めなく御扶持を受ける我こゆへ今日のお使者

は有がたく望む所の御控意と親子諸共打悦びお受致さよやあり升せねど圍碁の勝負のお相手はどふもお受はなり兼升る(傳)何お受が出来ぬとは(ふぢ)仰せの通り夫ト正房圍碁の勝負を平常より好ミ升たる其故に養子となせし藤三郎又實子の又七郎も幼年ながら見よお見眞似聊覺へはムり升れど夫トと申し養子の短慮も圍碁の勝負に起り事孫子の代まで重藏寺の家では碁將碁の争ひは法度に致す心得故既に先年菩提所へ血汐お染し碁盤迄納升たる時宜ければ此お相人はお免しある様よしかに仰せ下さり升ふ(傳)スリヤ夫故に御子息おはお手合せは成兼升るかト此時彌平次前へ出て(彌平)夫程迄に思召ならお宅でお圍み成るのをお止なされて殿様のお相人丈お許しあるが若旦那のお爲にもなり升ふりと存じ升(ふぢ)夫じやといふて此義斗りは(傳)然らば誠意をお背きあつてもし重藏寺の瑕瑾となる共苦しからぬと仰せあるか(彌)但し若旦那をれ役にお立被成れ升るか(ふぢ)サア夫は(傳)出來ぬ業なら是非なけれど覺へた圍碁のお手合せお受なさるが上分別と手前お於ては存升ト思入おふぢは考へる又七郎思案の思入よて(又)母上へ改めてお願ひがムり升(ふぢ)何改めて願ひとは(又)別義ではムり升せぬ今關氏や彌平次が申詞は理の當然またあかたには盲目の又七郎をお案じ遊ばし一生碁石をとらせまじと思召は無理ならぬと殿様よりのお召出し身の面目と心得升て出仕が致たふムり升どふぞ母上御使者様へお受なされて下さり升せ(ふぢ)そなたがそういふ心ならお請をするで有ふわいのう左様なれば殿様へよしかに仰せ下

あり升せ(傳)委細承知致てムる是にて拙者の役目も立ち先は安堵と申もの(又)途中の事故傳六郎殿失禮おゆるし下さり升せ(傳)なんのく然らむ此由立歸り殿へ言上仕り明日改め出仕の御沙汰を致すでムらう(ふぢ)左様ならば傳六郎様(傳)是にてお別れ申でムらふト傳六郎向ふへは入る(彌平)圍碁の勝負のお相人に殿のおそばへお出わらばまさかの時のよい手つがい(又ふじ)エ、(彌平)コリヤ若旦那御武連を開く小口でムり升ふト此時門の内より穴堀泥助以前の猫を捕へ跡よりの所化二人止ながら出て(泥介)コレく雲念さんも西心さんも止て下さるナく(雲念)そうで有ふが活もの命をとるは備へ恐れ(西)二度と再びこぬ様によふ言合めて廻さつしやれ(泥)イヤ夫よりはぶち殺しおしやます鍋にした方が腹のこやしにゐるだんべエ中くこいつは渡されましぬ(兩人)イヤくこつちへ渡したくトわやくいふを又七郎聞て(又)母上様承わればお寺の衆が猫を捕へて争ふ様子でムり升るナ(ふぢ)悪ひ事でも仕たと見へて下男に首を釣し上られ四足を縮めて居るわいのう(又)菩提の爲故其猫を助けてやりたふムり升(彌平)然らば拙者が扱升て助けてやるでムり升ふト泥助の方へ來りトキに泥助どん今若旦那が菩提の爲に助けてやるとおつしやるから猫はこつちへ渡して下さい(泥)重藏寺さんの若徒さん折角のお頼みだからお渡し申して上たいが此畜生めは宿なし猫で毎度寺へ來て盗喰をしたり亡者へ魔をさし踊らしたりろくな事は仕升ぬ故撲殺さねばなり升せぬ(雲)是れく泥助貴様の機に剛性を張てはよくない

(西)此普門院の一擅家重藏寺様のお頼み故其ま、早くお渡し申せ(泥)夫でもこいつを助けると又寺へ來て惡さを仕升からわしら々迷惑致し升(ふぢ)そちらの迷惑にならぬ様今日より邸へ連返り飼猫にしてやり升ふからどふぞこちらへ渡して下され(泥)そふいふ事なら是非がないそちらへ渡して上(又)コレく彌平次お寺の衆へよいよふお扱つてくりやれ(彌平)へいく承知致し升たト紙入より金を出して泥介に渡しおしやます鍋の代りと思ひ是で一ぱい呑で下せ(泥)是は早お氣の毒なそんなら猫はさし上(又)是は皆さん有難ふムり升ト三人門の中へは入る(又)そんな猫やら母上様一寸抱して下さり升せ(ふぢ)畜類なら頭をうなだれ有難つて居る様子サアく抱いてやりやいのふ(又)者の命を助ける程能善根はム升せぬ(ふぢ)今日の佛事に計らずも猫の命を助けしは(彌平)此上もないよい御功德(又)必ず恩をト猫を抱替へるを木の頭ら忘れまいぞト此摸様よろしく道具廻る本舞臺都て嵯峨山城下東嘉門町道場の体門弟四人試合のけいこをして居る白はやしにて道具止る

ト向ふより以前の傳六郎出て來り直に門口へ來て(傳)頼もふくトいへ共四人は心付かず切りに試合をして居る爰へ奥より半之丞出て來り(半之丞)御案内はどなたでムる(傳)是はく半之丞殿其許にも今日は當家へ參られお稽古でムるかナ(半之)どなた様かと存升れば傳六郎殿でムるよナまづくお通り被成れい(傳)然らば御免下れト内へ通る門弟は試合を

止め(一)是は(一)傳六郎殿我々稽古に實が入過ぎ(二)夢中になつて居りし故(三)御案内も心付かず(四)失禮御同用捨被下れい(傳)其御挨拶痛入る各々にも日毎のお稽古手前も感心致して(半之)シテここ元には何御用で當家へ御越しで(半之)今日拙者罷り越したは殿様よりの御内意にて(一)然らば此由先生に密談が(半之)罷り越して(半之)スリヤ殿様より御内意にて(一)然らば此由先生へト立掛るを與にて(嘉門)「イヤ東嘉門夫へ參つて御意得申そうト與より東嘉門出て來り是と」傳六郎殿能こそ御入來浪島侯の御使者とあらばまづ(一)是(傳)然らば先生死し被下れト傳六郎上座へ直る(半之)何か仔細はせぬと御密談とあれは我々は退座致すで(半之)承始め門弟は下手へは入る(嘉)御詰代數多を差置れ嘉門一人へ御密使とは早速掟意を承わりたし(傳)イヤ左ほど御配慮の義では(半之)シテ御内意と仰せあるは(傳)いつや當家へ我君が御鷹野の御歸るさお立寄ありし時貴殿の御息女おきくど乃お茶の給仕に出られし時殿には深く御懸想あつて折を見合せ其許へ御懇望の義を仰せられんと夫より致して町宅なれど御與へ召され指南番の大役を殿より仰せ付らるれど強て御辞退なされし故今日迄は町宅にて家中の者へ御指南あれど夫より御息女お菊殿を殿へ差上一生の御安泰を謀られるが老たる後の御要心及ばざるが拙者めが此媒介を仕れば殿の誼意にお任せある様内意を蒙り參つて(半之)いへども嘉門は考へて無言で居る故傳六郎は心得ぬ思入にて(傳)イヤ何嘉門殿先刻より傳六郎口を酔くして

申入れしが御身は殿に御息女を差上られるは御不承知よ(嘉)如何にも不承知この嘉門娘の影で立身出世は望みでない身不肖ながら某は楠流の軍學者たどへかすかに暮すとも唯清貧を旨となし僅か入來る門弟衆へ指南を致す東嘉門娘の縁にて出世などを望む所存は毛頭ムらぬ御歸邸のつて御主人へよしなに仰せ下されい夫故に使者の長居は御無用早く此場をお歸り下され(傳)スリヤ貴殿に(一)以て御不承知と何の然れ早く歸れと仰せある故直さま是邸なし主人へ此由言上致そう(嘉)併しながら其許には御使者のお役目御苦勞千萬(傳)左様ムらば嘉門殿(嘉)傳六郎殿(傳)是ふて暇致すで(半之)ト向へは入る茲へ與より半之丞先に門弟四人出て來り(半之)最早日暮よ至り升れば是にておいと致し(半之)客來故に今日は稽古もろく(一)致さず必ずおししく思召され(半之)コハ先生のお詞共覺へ升せぬ師弟の間に何故御配慮あされ升る(嘉)ト去り難き志願あつて此地を發足致し升ればお名殘惜しくも各と師弟の御縁も是限り(半之)イヤ拙者ハ聊先生へ申上たき密談あれ各々方にと拙者より一足お先へお越し被下れ(一)何かは知らず今日は(二)是にて御暇致升ト門弟四人に向ふへは入る嘉門は半之丞に向ひ(嘉)御所存有氣に半之丞どの何等の密談で(半之)傳六郎が過言の段々拙者が御詫をいたさん爲(嘉)扱は様子御聞ありしか(半之)懾りあれど御次にて逐一承知致し升た日頃よりして先生には御心潔と御性質不義の富貴の好もしからずと思居る、其矢先へ傳六郎が手柄顔に媒始なすと申せし故に御

氣に逆ひ飯令此地を御轉居あるとも御斷りをなされしは御尤なる御覺悟ながらそは一旦の御怒りにて我々共が師を失ひ其本意なさは如何斗り何卒御心和らげられ過急に此地を御立退は御見合せこそ然るべし愚存なれども兄あるものと浪嶋家の家老の列にも加わり居れば必ず悪しくは斗らうまじ令宵一夜の御分別こそ願わしうムり升(嘉)御壯年なる其許に御諭し受るは面目なけれど性來頑固の性なれば必らず御笑ひ下さるナ然し手前が短慮をばかほどまでに御配慮被下る御心中を推察致せば如何よも仰せを承知致し(半之)夫よて拙者も一ツの安堵左様ムらば明朝まで何卒御猶豫下さり升ふ(嘉)然らば小守半之丞どの(半之)先生御暇致し升るト半之丞向ふへは入る嘉門跡見送つて(嘉)流石小守の舍弟とて若年に似合ざる今の意見も通れ金言左は去りながら此年月飯令町家にあつても道に脊いて我娘を妾奉公致させしと言わるゝ事の無念さに傳六郎お管なくも手強く斷りやつたればコリヤトツクりと娘に逢ひ彼れが所存を聞かねばならぬ是を思へば壯年より英傑といわれしも子故に迷ふはト立上るを木の頭年じわへト此模様よろしく道具まわる

本舞臺都て嘉門邸小座敷の体時の鐘床の送りにて道具止る

「秋の日も早暮近々鳴響く無常を悟る娘氣に心細くも立出てト奥より嘉門娘おきく書置を持出て來り(きく)親のゆるさぬいたづらと濟ぬ事とは知りながらツイ御情にほだされて市之丞様と言かわし只の身にてもある事か思ふ御人の御胤まで舍せし上の遠からず死ぬる覺

悟を定めしも降てわいたる浪嶋の殿さまよりの御懇望たどへ町家へ交るとも不義の富貴は好まぬと父上様の御立腹も半之丞様の執成しにて此身に逢て挨拶を聞て見るとの御詞を知つては片時このまゝお生て居られぬ身のせつば未來で御詫を致し升れば不孝の罪は父上様どうぞおゆるし下さり升せトおきく件の書置を床の間へ置き技折門を出様とする所へ上手より伊村市之丞門弟の拵らへにて出て來りおきくを見て(市之)おきく殿扱はこなさも死ぬ覺悟か(きく)市之丞様よい所へ御出被下升た父上様への申譯に死ぬる覺悟でムり升故おなたは跡へながらへて父上様の御世話を御頼と申升「かいこつて走行を帯際とつてしつかと引止ト行うとするを市之丞引止めて(市)これ侍つしやれおきくどの死で能ければ身共から先へ死なねばあらぬ時宜まアく下居さつしやれト床の合方にありいふて返らぬ事をがら我父伊村宗太夫殿御果なさるゝ其折に當家の主人嘉門様此身の指南をくれ」と御頼みありし夫故に父なき後の親同然萬事御世話なし下され剩へ御宅へ引とり内弟子とあし我子の如く御教諭下さる御丹精其大恩も送らずしてたつた一人りの御息女を疵ものにせし身の大罪いかで無事に居られ升ふ元の起りは市之丞が只何事も引受て切腹なして相果ればこなとは命全ふなし掛がへのなき御親父へどふぞ孝養つくして下され夫がこなたへ一ツの頼み(きく)其存命のあり兼升はあなた御胤を身に舍し膿妊をして居り升わいなア(市)スリヤ得より身重にあられしか(きく)夫ゆへどふも此まゝに生て居られぬいたづらもの成ふ

事なら諸共に未來へ御連れ下さり升せ(市)と有て一所に死ぬ時はあの世へ行ても親達へ猶々濟ぬ此二人(きく)そんならどふぞ私を先へ死なして跡から御出なされて下さり升せ(市)夫ではやはり舍し子まで闇から闇へ遣る道理(きく)生きても不孝死んでも不孝(市)コリヤ何としたりよからふナア「死ぬに死なれぬ兩人が途方に暮るゝ折からにト兩人愁ひのこなし此時奥に(嘉)不所存ものゝ市之丞成敗いとす覺悟いたせ」見やるあなたの奥の間を鎗引提て東嘉門苦痛をかくし立顯れ只一突と詰寄る嘉門は吐息もいとせつな氣にためらへば夫と早も見て取てト文句の通りよろしく有て嘉門は始終息の切れる思入れ市之丞は此体を見て(市)先生には何故に御切腹なされしぞ「星をさゝれてにつこと笑ひ(嘉)流石は伊村よく察しと豫て御身と我娘譯ある事は察せし故折がなわれれば表向夫婦になさんと存せしも思ひ掛あく浪島家の所望は此身の大難とわざとすげあく斷りを言ひしは殿へ言譯に切腹致す兼ての覺悟いづく如何なる果なるとも兩人連立立退いて先頃絶へし伊村の家と東嘉門の名跡の絶へざる様に致してくりやれ是が則お身へ頼みまつた嘉門が秘術とる補傳來管鎗の奥義は未だ譲らぬを幸ひ娘が御引手今際のかたみ市之丞いざ〜傳授を得會せよ(きく)かゝるお慈悲のある事も知らぬ此身の勿体なさマア〜に休み被下り升せ「泪にぬゝ袖袂縫る娘に強氣の嘉門心とゆみてどつかと座すお菊はひざに摺りよつて(きく)疾より御存ムり升ては今更めてお詫をば申上るも詮なければ三年以前に母様が果をされし其後は父上様の

御丹精日頃あなたのお諭しにも軍學教授の此家へ生れしからは女子でも(きく)弓馬の道に心をよせ紊らな事は仮初にもしてはならぬと御教訓其御詞も打忘れ不義をなしたる身の徒ら死でも罪は消へ升せぬをお情お慈悲に二人りとも添はじてやらふとお命までお捨なされた勿体なさどふぞあなたを叶ふ事あらお療治遊ばし道も背いと我々の命をお取り下さり升せ「おいたわしやと寄纏る傍へ聞せる市之丞面目あげに默然と暫し詞もなかりしが是までありと諸肌くつろげ既に覺悟と見へければト市之丞覺悟のこなしにて差添を抜腹へつき立機とするを嘉門と止て(嘉)うろたへたか市之丞御身只今自殺なし嘉門に犬死さずるとは返す〜も不所存なり(市)デモ大恩あるあなた様を先へ立て升して罪人たる拙が存命致され升ふや(嘉)サ、夫が所謂狼狽ものの切腹なして相果なば不義の言譯立にもせよ伊村の苗跡斷絶させ冥府へ趣き亡き父への面下て言譯致す又二ツには恩義ある師匠の身共に犬死させ東の家まで斷絶させ夫で言譯立ふと思ふや死ぬも生るも兩家の跡目大事と思ふ我切腹早まる場所でもあらざるぞ「言諭されて市之丞はつと斗りに身の當惑傍におきくが泪聲(きく)是程までに父上が事を解とる御諭しを背ひて二人死ぬ時は不孝お不孝を重ねる道理(市)何様是は拙者が鹿忽須彌蒼海にもたとへ難き厚恩蒙る師の名跡斷絶させては此上に罪を重ねる市之丞(嘉)其所へ心が附しなら世に便りなき我娘必ず見捨くれぬ様夫婦中よく添遂て舍し胤を成長させよ(せく)そんなら懐妊せし事も(市)疾より御存じム升たか(嘉)知

らぬでならふか親じやわへ「ハット互ひに顔見合せ兎こういらへも泣斗りかくては果じど
 氣を勵まし(嘉)ヤア不覺の泪は時刻をうつし家に傳わる鎗術を息ある内に會得なさは家
 名を立る甲斐有まじイザく穗先を受けて見よト鎗をつき掛る市之丞はたきくの平打の釘を
 取て受る是より試合の立廻此内知らせなしにて元の道場の道具も戻る以前のおきくは茲に
 菊燈臺を点けて居る嘉門市之丞は立廻りながら出て能見得にて止り(市)ハッ得と會得致し
 升てムリ升(嘉)是にて思ひ置事なし早く此場を立退ぎやれ(きく)イエ／＼どふも此まゝ
 (市)立退く事は出来升せぬ「義理を立切次の間より勝平お房が立出てトたきく市之丞左右
 より寄て介抱する爰へ奥へ勝平若徒の拵らへおふさ下女にて出て來り(勝平)アイヤ且那様
 の御先途は及ばすながら下郎めがきつと見屈申升れば(ふさ)人目にかゝらぬ其内に御二
 人様には今宵の中(勝)片時も早く此家をバ(ふさ)御立退かされ升せ(市)扱は二人も(きく)
 疾より様子を(嘉)二人のものへ申付け我亡跡の取片付萬事言附置たれば心残さず落延よ
 (きく)とどい／＼どふも(市)あなたを捨て立退く事は相成升せぬ「折しも表へ提灯の燈影に
 驚く勝平がト勝平向ふを見て(勝)向ふより走せ來るは浪嶋家の御定紋薩に當家へ御出の様
 子(ふさ)夫では大方先程の御侍様が又もや御出でムリ升ふ(嘉)夫あれば猶以て猶豫はなら
 ぬ支度いたせ(きく)そんならどふでも(市)ア是非に及ばぬ(嘉)サ、早ふ／＼「是が一世の
 別れかと惜む名残の兩人いせき立られて是非なく／＼支度にたつが弓取の武威も正しく表

の門小守は家來先に立て様子有氣に歩行來てト此内市之丞おきくは思入有て上手へは入る
 向ふより小守半左衛門中間に手丸の提灯を持せ出て來り直に舞臺へ來て(半)案内致せ(中
 間)頼まふ／＼(勝)ハ、ッハ「折悪けれど勝平が明る門口夫と見て會釋をなせば半左衛
 門目禮をして何氣なく(半)許しめされト半左衛門マツト通る嘉門は苦痛をこらゆるこなし
 にて(嘉)是は／＼半左衛門殿夜陰を厭わす能こそ御入來ト半左衛門は嘉門の体を見て(半)
 嘉門殿は何故に痛手に悩み居らるゝな(嘉)是ぞ娘を御所望ある浪嶋公へ申譯イザ御見届
 下されいト肌を脱ぎ見せる半左衛門是を見て残念のこなしにて(半)よしなき殿が色好より
 文武兼備の嘉門殿あたら一命捨さしは返す／＼も残念なり尋るまでおもあらざれど御覺悟
 ありしは御息女も御殿へ上るは御不承知かナ(嘉)いかおも心に染ぬと見へ家出致して行衛
 知れず(半)扱は息女は最早當家をトむつと思入れ此時下手白壁の間より市之丞おきくの手
 を引出て花道まで退れ行くを中間は見咎めて(中間)今の二人はど外の方へ行を(半)いらぬ
 詮索ト手丸を吹消を木の頭捨置け／＼ト半左衛門は扱はといふこなし嘉門はがつくりなる
 花道の二人は舞臺を伏拜む此模様本釣鐘の送りにて幕引付るト幕外の市之丞おきく愁ひの
 こなしにて送り三重になり向ふへは入る跡留の木にてシヤギリ

三幕目

浪嶋家廣間の場

同土藏塗替の場

萬石取茶入墨附

明治十三年四月

猿若町市村座於興行

大詰 越前大野峠麓の場

福井城内評定の場

一御臺勝姫

一多賀谷豊後

一幼君仙千代

一水谷長門

一老女村尾

一馬士太郎吉

一中老鯖江

一諸士 六人

一こし元 六人

一足輕 六人

一小粟美濃守

一雲助 六人

一荻田主馬

一天海大僧正

一小粟大六

一大久保彦左衛門

一荻田作十郎

竹本連中

本舞臺一面の平舞臺後ろ一面の山組上下同じく山の張物諸所に松の立木都て越前國大野峠
廻の体爰に雲助四人立止り居る此見得山おろしにて幕明く

(○)コレ岩松なんと面黒ひ事だ始まつたでねへか(△)さうともへ福井の城下で軍が始ま

るとの事だ(□)もし初らばこつちの世界い、もわるいも五一三六だ(△)貧乏人の世直しに
一ツ始まれば能い(○)併し問屋場よまご付て居ると早打だのお傳馬だのと人足に遣われる
から成丈人目にかゝらぬ様に山の中へでも隠て居よふ(□)それが能ひへもうそろへと
追はぎ位ひは始めてもよからふぜ(□)まさか軍が始まらぬへ中分捕功名も出来ぬへ譯だ
(△)まア免も角も山へ行つて(△)焚火でもして暖たまらふ(□)待てば甘露の日扣といふか
ら(△)時節の來るのを待と仕様(○)夫が能いへ(四人)サアへ行ふへト山おろしにて
四人は上手へは入此時向ふ揚幕にて(太郎吉)あいハナア瀬に任む鳥ヤ木の技にナアト聲す
る是を馬士唄になり向ふより二幕目の太郎吉馬を曳き此上に南幸坊天海鼠の着附香染の衣
にて風呂敷包みを馬につけ塗笠を冠り出る跡より前幕の彦左衛門綿頭巾野袴ぶつさき大小
小紋の手甲脚半塗笠を冠り杖をつき出て來り花道にて(天海)コレへ小僧よ向ふが山の麓
と見ゆればあれへ行たら下ろすがよいぞ(太)峠は馬が太義がるから夫ヒヤア御免を蒙升べ
え(彦左)馬をいたわる心掛は身共も感心致したぞよ(太)イエどふいたし升てハイへト
右の鳴物にて舞臺へ來り夫ヒヤア是から山道さから是で下りて下せへ升しト馬の絆を松
の木へ結び付る天海馬より下る此内彦左衛門懐中より錢を出して(彦)コリヤ子僧極めの駄
賃を遣わずぞ(太)ハイ是ヤ大きに有難ふムリ升(天)駿河臺のお立換夫れでは痛み入升る
(彦)イヤへ跡の立場でそばを三杯御馳走あなつたから是でいんだりと申ものヒヤ(太)そ

うしておまへ様方峠を越してどこへ行かつしやる(天)我々は當國福井の城下まで参るのじや(太)そりやア何にお出なさるかけんのんだからよさつしやい(彦)ナニけんのんとは夫やなぜだ(太)ハイ近々軍さが始ると専ら噂さを仕升から怪我でもするといけ升せん(彦)イヤ其軍さを見たいからわざ／＼江戸から出掛て来たのだ(太)御出家様のおぢいさんの癖にして物好きな人も有たものだ(天)何様子僧の了けんで左様に思ふも尤もじやがさし構ひのなき我々故飯令軍さが始まつても何の恐るゝ事はない(彦)コリヤ子僧然らば是が越前大野峠と申すのじやナ(太)左様でムリ升(彦)シテ此近所に百姓の太郎助といふものはないう知つて居るなら教てくりやれ(太)エ、どふして夫をおまへさんがト恟り思入れ(彦)驚く事はちい其太郎助といへものゝ厄介になり居ると申す關根彌左衛門と申者に面會致して参り度いのじや(太)夫りやアおまへ様は關根様の御親類様ムリ升か(彦)ナニ親類といふ譯でもないが先頃江戸へ尋ねて参り面會致せし事もあれば當地にゐるなら逢て行たい(太)ソリヤ折角でムリ升が關根様おは此の間江戸からお歸りなさると其まゝ己れの望みが叶つたと心祝ひをなさい升して信州の高島とやちへお立なされ升た(彦)ム、ソリヤ太郎助と申のは(太)ハイ私しのだつさんでムリ升(彦)ハテ扱て夫れは不思議な事じや(天)扱は嘶に承わりし福井の忠臣關根とやらを匿まひ置きし農夫と申すと子僧の父にてありつるか又た關根事は信州の高嶋へ立越せしとは正しく老臣美濃守に歎願あつて参りしならん(彦)シテ又如

何なる譯有て關根主従を其方宅へかくまいしかや(太)夫に付てもいろ／＼とお話しの有のでムリ升(天)袖ふり合ふも他生の縁夫れにて話して聞すがよい(太)そんなら譯を聞せ升せふ〇ト天海彦左衛門は岩臺へ腰を掛ける太郎吉は下に居る是れより木魂の入し合方になり「其譯と申升のはわしの弟がつかアのまだ腹の中ゝ居る時分福井の殿様が御鷹野先で手討みすると仰しやつたを關根様々助けて逃して下すつたを其腹立で殿様が關根様の御新造さんと切殺し遺趣返しをなすつたは皆御家來に惡ひ御人が附添故だと關根様が其惡人を殘らず殺して腹を切らふとする所へわしのだつさんやおつかアが通かゝつて御止申し今居る所へ一所に逃げかすかな暮しの其所へ居候ぐ二人殖へ又おつかアが産をして厄介が殖へた故わしもこうして馬を追ひ稼いで居るのでムリ升(天)ソリヤ夫故に困苦なし一旦受し恩を忘れず浪士を貢ぎ居りしとナ下民に似合ぬ親子が心底我等に於ても感心致す(彦)併し一度衰へても誠の道を守るものと必ず末に幸福を得て立身出世を致す間夫樂しみに辛抱致せ(太)大野峠のわしの内は是から跡へかへり升て庚申塚から昇りの裏道そらいふ御方でムリ升なら今夜は泊つて御出なさい(彦)其志は忝けないが關根が留守とあるなれば(天)直と是より福井へ立越へ兼ての一義を斗らわん(太)そんなら御寄りなされ升せぬか(彦)いづれ戻りに尋る間(天)まづ今日は寄らずに参る(太)無理に引ばつて行程の奇麗な内でもムリ升せんから夫じや、是で御別れ申升ふ(彦)早く内へ歸るがよいぞト太郎吉馬の手綱をといて居

る爰へ上手より以前の雲助四人出て(○)旅人酒代を貸して下せへ(天)扱はわいらは狹箱やナ(○)エ、面倒だ疊で仕まへ(三人)合点だト二人宛典海と彦左衛門に組付是にて天海は口の内に呪文を唱へる薄ドロくにて雲助二人悶絶する此内彦左衛門は二人の雲助を兩の手にて首玉を付する太郎吉此体を見て(太)大層力のあるお二人(天彦)邪广なき内に○イ双方一時に雲助四人を見事に返す是にて馬剣上るを太郎吉しやんと止る双方見合て木の頭ら早く行きやれ(太)エ、どふ蓄生めドウくト馬を曳て向ふへは入る山嵐しにて此道具まわる

本舞臺四間通し高足の二重本庇本椽附真中書院階子正面白地大形の襖上下盡心に襖の出は入貳重の左右石垣の張物能き所に松の立木都て城内庭先の体平舞臺に前幕の大六作十郎肩衣脱かけ後ろ鉢巻にて打伏し居る是を上下大小の諸士六人介抱して居る此見得どんくにて道具止る

(○)江戸表より火急の早打(○)大六殿作十郎殿(○)旅中の勞れに氣絶なし(○)此庭先へ參ると其ま(○)一向息もたへてゐるが(○)兩家老へ申上んト此時上下の襖にて(美濃)知らせぬ美濃守(主馬)萩田主馬も夫へ參つて(美)知らせの様子(主)承わらん(○)アノ御聲は(六人)兩御家老ト管弦になり上手より小栗美濃守下手が萩田主馬兩人共更たる拵らへ大小上下にて出て來りツカくト傍へ來て兩人の様子を見て(美)誰ぞあるか藥湯もて○ト

下手にてハツと答へて茶道一人銀の茶碗を持出る此内美濃守は大六主馬は作十郎へ氣付を吞せる諸士皆々指揮して件の湯を二ツの茶碗へ分け双方一時に吞せる事よろしく大六作十郎息を吹かへず故家老二人はきつとなつて「ヤア不覺かり忤大六(主)作十郎にも耻辱千萬(美)斯る大事を早打を(主)遅なわりして(兩人)不届至極トきつといふ是にて兩人とつきりとなり(大六)スリヤ刻限が遅なわりしか(作十)眞平御免被下れ升ふ(美)シテく様子は何なるぞ(主)いわずに居ては尙々怠り(美)仔細をつぶさに(兩人)申てよからふ(大)ハ、ツ只今言上(兩人)仕り升るト腹帯をめてきつと思入是方誂へ大小入合方にあり(大)先頃早速急飛脚書狀を以て申送れば定めて様子は御存あらんが殿様には御情々や井伊掃部頭へ御預けの後豊後府内へ御流罪といよく御所刑定り升た(みなく)ヤト忤り思入(作十)はつた老中評議の上城受取の人を撰み新役たる内藤修理殿直様當地へ向わる、由承わつて驚き入り上使の來らぬ其内に御注進申ヒんと急ぐ道中も(大)遅參なしたる面目なさ(作十)御用捨なされて(兩人)下さり升せト思入にていふ(○)スリヤアノいよく(六人)御流罪とナ(美)夫もて役目も相濟だ(主)次へ參つて休息致せ(大作十)ハアト立ふとして心のゆるみしこなしにてどふとなる(美主)各々御苦勞ながら(諸士)ハツト大六作十郎の介抱して上下の襖の内へは入る跡兩人あたりへ思入有て(美)アイヤ主馬どの御進み被下れ(主)ハツト前へ進む(美)ヲテそこ元よは此上にては如何召る、御所存よナ(主)されば此儀は善惡共

御臺所へ申上ゲ評議一決仕らふと手前に於ては存じ升(美)ム、手前も左様存る所(主)然らば一家評定の儀を(美)御臺所へ申上んと此時後にて(勝姫)知らせに及ばぬ聞た(二人)ハ、ット左右に平伏する是よりどんちやんの鳴物になり正面の襖を明け勝姫下ゲ髪後鉢巻鎧附太刀にて長刀を持子役の仙千代同じく鎧の形り老母村尾中老鯖江何れも下髪後鉢巻胸鎧小手脚當の女武者にて薙刀を持此外こし元六人何れも襷はち巻にて薙刀を持附添出て勝姫子役は二重の上手にて革床几へ掛る左右に老女二人扣へ平舞臺は腰元六人下りて左右に並ぶ美濃主馬は此体を見て恟りなし(美)スリヤ御様子を御聞遊し(主)早御籠城の兩人御支度よナ(勝)それ兩人より申聞せい(村尾)ハ、ット前へ出る是よりどんちやんの入レ合方になり「御兩所の御意見も待ず致して籠城と御決定遊ばし升たも此度の御家の大變承るも無念の至り元はと申せば神君様百萬石の御加増と仰せられたる御詞も反古となりたる事よりして我君様の御乱行夫のみならず御臺様は當將軍家の姉君故申さば天下の御兄君(鯖江)夫を此度普請の御手傳ひとして十萬石下したまわると又候や虚言を構へて江戸へ招き我君様を伊井殿へ御預けの上御流罪とは余りと申せば御當家を侮り過し關東の御仕方故お止を得ず御臺様には御籠城の早御覺悟でムリ升(勝)そち達二人も多年の間勤勞苦心は察し入るたらわぬ女子や幼年の此仙千代を見限らば遠慮致さず勝手に關東へ隨身致して當城へ又を向るは苦しからず勝手に暇を遣わさん(仙千代)又忠臣の心あらば今は便のなき母や身を補

ひて關東の敵を引受籠城して俱ふ力を添てくれぢいよ返事は如何あるぞト此内美濃守主馬よろしく思入有て(美)ハ、ット御尤なる其御怒り仮令謀叛の汚名は取るとも只今の期に望み何故敵へ隨身なさん多年御恩の御主人へ御敵對が成升ふや(主)善惡共に臣たる身は主君に附が武の本文まして况や御幼君や御臺所を見限つて此まま退城致されん其義は御疑念(兩人)傍晴し被下され(村)スリヤ御味方を(鯖)下さるとナ(美)君よ代わつて塵串とり俱に防戦仕らんが斯く御鎧に身を固め敵を防禦の御支度は早まり給ふ御粧ひ(主)常の御衣服に改め給ひ關東方御上使人來の御沙汰まで御慎みが御肝要かと憚りながら存升(勝)其意見は尤ながら先んずる時は人を制し遅るゝ時は制せらる例しにならふ此支度早まるとばし思くりやるナ(美)シテ御臺には何故に(主)其支度を遊せしぞ(勝)其仔細申聞さん〇トどんちやんの入レ合方になり「抑籠城を致すに於ては日本國中敵に引受防戦さぬばならざる故仮合當家の忠臣等が必死を極め働くとも高の知れざる小勢なれば三日と持たず落城なす事鏡に掛けて見る如く是を救ひの援兵なくては長く籠城覺束なしと思ふが故に關東より上使來らぬ其内隣國の諸侯を頼み援兵の義を申入れ承引なさざる其時は兵を起して城地を乗取味方の要害堅くせねば勝利得難き此戦々様な事は自ら申さずともそち連が鍛練なせし軍略ながら味方致すか退城なすか其心中の斗られねば近頃狂氣の振舞ながら巴山吹板額の古例に習ふ此支度早まるとばし思ひくりやるナ(美)ハ、ット流石は當時將軍家の姉君に渡らせ

給ふ(主)其お血筋の御氣質顯われ御神速ある思し立(美)感佩致して(兩人)ムリ升る(勝)ス
 リヤ得心ガ参りしか(美)其御賢慮を聞上は御出馬遊す迄も亦く(主)われく諸國をかけめ
 ぐり味方の催促仕らん(勝)然らば家臣の面々も味方致すか退城なすか(村)其否哉おは御兩
 所より(鯖)お調べなされて下さり升せ(美)へ、委細承知(兩人)仕り升るト此時上下の襖の
 中にて(豊後)其返事はわれく(長門)夫へ参つて申上ント鳴物きつぱりとなり上手な豊
 後上下大小ふて先へ立ち以前の諸士三人下手な長門先に諸士三人附て出て貳重より下り平
 伏する(美)スハ各々には此場の様子(主)お次に於て聞かれしか(豊)委細はあれにて承わ
 りしが長御尤ある其れ覺悟(○)只今とあり何故か(○)關東方へ隨ひ升ふや(○)何卒臣下の
 我こに(○)お心置れず御籠城の(○)列へお加へ下さる様(○)一同お願ひ(六人)申奉ト勝姫
 是を聞悦ばしきこなしにて(勝)ヲ、勇ましき其詞世に落果し仙千代や妾の詞を反かすして
 一命投うつ籠城の味方するとは頼母しい(村)是と申も御老臣のれ二人様が魁に君よ御加胆
 なされし故(鯖)直ちに整ふ此評議(こし元○)私共も一同に(同□)恐悦申し(皆々)上升る
 (勝)仙千代には昔のものへ(村)お詞下し(村鯖)置れ升ふ(仙)皆のもの過分なる予(豊)恐入
 升て(主後みなく)ムリ升(勝)夫にて妾も安堵致せば小栗萩田の意見に附き衣服を改め休
 息なさん(美)又我々は軍法の(主)評議致すでムリ升る(勝)何卒に能きに頼み升る左様ムら
 ば御臺様暫時御免を蒙り升るト皆々勝姫と仙千代へ一禮なし上手へ別れては入る跡に子役

と女形皆々残り勝姫思入有て(勝)腰元共は夫へ出い(こし元)皆々ハアト前へ出る(勝)只
 今是にて聞やる通り家中一統異存もなく万事整ふ上からは其方達なぞが居らひでも防禦の
 ちらぬ事もあるまい長の年月召仕ひ名残惜くは思どもあたら若木のそなた衆を苔のまゝに
 散すのが如何にも不便と思ふゆへ今々暇を遣わせば勝手次第に宿元へめいく退身致して
 くりやあかぬ別れも其身の爲必ず悪しく思ふまいぞこし元(○)イエ仰せではムリ升れど
 何故有て私共と(□)只今となり一命おしみ身の安体を悦び升ふ(△)女子の事故氣おくれし
 て物の役に立つまいかと(△)思召かは存じ升せねどたらわぬ乍ら花々敷(◎)お味方致す
 心得故(◎)人数へお加へ(皆々下さり升せ)村スリヤども有ても皆さんには(鯖)味方をね願
 ひなされ升か(○)命を捨るは覺悟の前(□)何故退身(皆々)致し升ふ(勝)ハテ頼もしいト薙
 刀をつくを木の頭ら者共じやナアト皆々引張の見得どんちやんにて此道具廻る

本舞臺一面の平舞臺後ろ一面の武者窓のある白壁裾通り石垣上の方筋金のある潜り附の城
 門正面の大扉切あり下の方に見附行燈能き所に振よき松の木都て城外の体爰に鎧下の
 軍卒六人得物を持ち立掛り居る此見得どんくにて道具止る

(○)イヤ何各々彌々今日江戸表より小栗萩田の御子息兩人早打にて御歸國あつて(○)當國
 の殿様御流罪と御所刑極り井伊どのへお預けと相成しを(○)御注進に及ばれし故御臺様に
 も御籠城と御決心にて一家中へ(○)仰せ渡しがありし故俄にさわ立此城内(○)我々共は出

口をかため間者の輩を詮議の役目(六)東御門を廻つたれば西の御門を廻るでムらふ(一)サ、各々お越しあさいト六人上手へは入る跡合方へかすめてどんちやんをあしらひ向ふが以前の天海彦左衛門出て来り花道にて(天)ちんと彦左殿噂さに違わす城外が大分さわだち居る様子でムる(彦)左様でムる手前は戦場で生残りの親父故軍さの中へ参るのは何とも思わぬが大僧正には沙門のお身故御迷惑の程お察し申す(天)イヤイヤさのみ恐れはせぬが間者の物と間違られ飛道具でも向けられはせぬかとそれが一ツの心配でムる(彦)イヤ道徳尊き大僧正なんで飛道具が當り升ふぞ(天)坊主天窓と鐵砲玉は丸い同士故けのんでムる(彦)何をいわれるアハ……(天)まづ兎も角も向へ参らふ(彦)まづ……お先へお越しあさいト兩人舞臺へ来る此時上手より以前の六人出て左右より取まき(一)怪しい老人(六人)動き居るナ(天)扱こそ間者と間違居つたか(彦)コリヤヤ……必ず聊示あるなわれ……共と關東より中裁に参つたのじや(一)ヤア薄穢い形りをして(二)關東よりの中人杯とは(三)とほう途徹もなき奴等(四)察する所氣違坊主(五)一人は流浪の偽せ親仁(六)命斗りは助けてやる(一)きり……當所を(六人)立去り居れ(彦)是さ……貴様達は口に物がいらぬと思ひ無闇にそんなに力むまい余り威張と臍が損じ腹形りがわるくなるぞ(天)偽せ親仁か氣違ひ坊主か取次をして然べき侍が出て一ト目見れば速に譯る事じや邪摩立せずと取次さつしやれ(一)ヤチ又わいらは何ものだ(二)夫から先へ名乗て聞せろ(彦)イヤ其前は貴様達にめつたに名乗て

聞せられぬ(天)只駿河臺と川越が来たと取次すればわかる(一)ヤア千本櫻を見る様な(二)駿河臺の川越のど(三)化され染た名を名のり(四)夫が取次ぎ致されうか(五)達て取次ぎ頼みたくば(六)誠の名前を(六人)名乗て任まへ(天)彦左どの面倒じや名前を名乗て通り升ふ(彦)左様致そうエヘン……ト咳拂ひをして肩をいからし「遠からんものこそ音にも聞け近くば寄て目にも見よ事も愚かや我こそはそも平介の昔しより御神祖齋の眞文珠山の戦ひを初陣となし元龜天正の御戦にも數度勳功をあらわしたる大久保彦左衛門忠佐なるはトさつと睨む(六人)ヤア……ト胸りする(天)又連立し拙僧は恐れ多くも尊くも今の世界の活沸と人も敬ふ名僧にて都は比叡の山門に入り東まにあつては川越の芋も喰飽き江戸へ出て花の上野の山住居大僧正と仰がれて御當家三代御師匠番又ある時は將軍家の御意見番とも尊まる、南幸坊天海あるわトきつといふ(一)ヤアろんを穢ない形りをして(二)南幸坊も凄まじい(三)いよ……二人は氣違だ(四)搦ふ事はあい打すへろ(六人)合点だ……ト立掛る彦)ヤ、斯姓名まで申聞すに(天)無禮致さば許さぬぞ(六人)何をいやがるト捧を振上る此時下手の門の内にて(豊長)者共扣へいト聲する故(六人)ハット胸りして扣へる是にて上手の門の潜りより多賀谷豊後水谷長門の兩人上下大小にて出て来り彦左衛門天海を見て下手へ来り(豊)ハ、思ひ寄らざる御兩所さま遠路の所を御入來(長)番人共が疎忽の失禮眞平御免(兩人)下さり升ふト平伏する(彦)イヤ……何も詫るに及ばぬ彼等が不禮は我々を本物な

りと知らぬ故じや(天)又此方とても旅中のつれ／＼戯れ半分誠の事を申入れざる其故なり
 (彦)無禮はゆるす(兩人)其ま／＼(豊)倍臣の義ふムり升れば御兩所様おは我々をお見覺
 へはムり升まい拙者は當家の老臣格多賀谷豊後と申もの(長)又拙者めは同役にて水谷長門
 と申ものシテ遙々の御出張はいかある仔細にムり升るか仰せ聞られ(兩人)下さり升ふ(彦)
 イヤ／＼其義は城内へ罷通りし其上にて得と發言致すであらふ(天)只何事も旅僧と知らぬ
 親仁のお扱ひみて目立ぬ座敷へ御案内下され(豊)デモ左様なる不禮をなしては(長)後日に
 われ／＼役目の落度(彦)其無念のなき様に(天)我々跡にて詫を致そう(豊)左様ムれば兎も
 角も(長)御兩所様には門内へ(彦)コリヤ／＼夫なる番人共(天)今の事は内々じやぞ(○)夫
 にて我々(六人)助りり升(豊)イヤ御案内(長)仕り升ふ(彦)然らばお先きへ大僧正(天)まづ
 〳〵お先へお出下さいト時の太鼓にて四人連立上手の門の内へは入る跡六人は呆れし思入
 にて(○)イヤ飛だ間違もあるものだ(○)すんでに棒みて打すへて(○)大しくじりをやる所
 を(○)御家老方に止められたわ(○)誠よ是が天の助け(○)イヤうつかり人は(六人)侮れぬ
 わト此もよふどん／＼にて道具まわる

本舞臺一面の平舞臺上下折廻しの杉戸正面九尺の立派なる佛壇内に美事なる位牌を飾り好
 みの欄間左右唐戸の扉此下蓮を畫さし銀地の袋戸上下同じく蓮を畫し白地の張壁舞臺一面
 の高麗べりの薄べり都て城内佛間の体爰に以前の勝姫襦形りにて徑机へを前に置き香を焚

て居る此見得床の送りにて道具止る「櫻木の花は開きさわりある嵐も福井の奥御殿散るを
 惜しまぬ籠城に御臺所は佛前へ詫の回向ぞうとてけりトこの内勝姫よろしく有て床の合方
 よなり(勝)御先祖様へ御詫の御回向申上り女子の身にてあられもない籠城の義を思ひ立末
 代謀反の穢名を取り御家改易になり升るは不孝の罪の此上なき思ひ立とは存じ升れど御乱
 行とはいひあから元とどいへむ自らの曾祖父様に御當りある神君様の御斗らひがよろし
 からざる夫故についよは若氣の御乱心○「夫へ附入る佞臣がよからぬ事をわがつまへ御進
 めありし其故に將軍家のおとがめ受たる大事を起し夫も忠臣彌左衛門が家の爲とて悪人を
 討て立退さくれし故我君様の御身持追々直り嬉しやと喜ぶかひも情けなや又此度の凶變と
 犯せる罪のあるとはいへ一家の好みもあるものをいかに諸侯へ見せしめとて御流罪なりと
 は恨めしい無殘念に入らせられんと推察なせば其ま／＼に家改易を余所に見ておめ／＼城
 地は渡されず○「夫も此身が將軍の現在姉に當るゆへ嫁したる先きの家國を失シとて厭わ
 ぬかと我夫様の御疑會かゝるまいともいわれねば籠城なして親子共討死なすが身の潔白
 「さは去りあがら越前の名家と呼ぶ／＼當城もやがて烟りの熾ふと共に落城なす目目前故御
 先祖様へ對して不孝の罪ふムり升れと余義なき次第の申わけの世へ參つて細々と詫
 致すでムり升ふ「お詫／＼と斗りにて跡は泪に伏沈む様子白木の小四方へ扇をのせて幼君
 は佛間の内へ入り來りト此内勝姫愁いのこなしよろしく上手の杉戸を明けて以前の仙千代

鑑下になり三寶へ扇をのせしを持出て來り(仙)母上様へ御内へ伺ふ事がムリ升「折目正しく伺へばこなたは夫と見返りて(勝)テモ思わしい其三寶もなには何を仕やるのじや(仙)此度籠城致し升てもし落城の其時は腹を切らねばなり升まいと腹の切様母君へお伺ひお参り升た「聞て御臺は胸せまり泪に聲を曇らせて(勝)ヲ、健氣なる其覺悟夫ヤモウそちの言やる通り時世につれる人心草木も靡く將軍家皆隨身の諸大名十の者なら九分九厘當家へ味方は致すまじ遅かれ早かれ落城と心は極めて置ねばならぬもし討死時至らば臣下の者お先達て見事に腹を切りやるのが大將たる身の心掛よふまア心が附きやつたのふ一口に獲れど胸の中思ひやるほどいたわしさ(仙)そうして腹へつき立升にはどふ致すのでムリ升(勝)母が只今して見すればよふ見覺へて置升ふぞ「香爐の臺を三寶と見なす扇の雛形も珠數にかへたる式作法教るも又いぢらしく幼君早くも見て覺へト此内勝姫經机の上にある香爐の臺を取て前へ直し水晶の珠數九寸五分の様に手に持腹へ突ゑぐるこなしなぞよろしく仙千代へ教へる仙千代是を見て(仙)左様ならば此様に致し升のでムリ升るか「形の通りに違ひなく腹切る眞似も一度にて辨へのよき生れ立ト仙千代切腹の眞似よろしく(勝)ヲ、其通りじや忘れまいぞ〇「こんな惻發な子を殺す親の心は又一倍いふて返らぬ事ながらいつぞや妾わが我夫へ諫を入れし其時にお心改め給いなば此騒動も成まいお入らぬ女の差出ものとお叱り有て露程もお用ひなきが害となり今のなげきとなつたるか(仙)そして此身が

切腹を致升る其時はおなたも腹を召升るか(勝)ヲ、其時の此母も女子の事故そちの様よ腹の切らねど自害して俱々最期を遂升る(仙)そうして自害と仰り升と(勝)咽をついて死ぬのじやわいのう「聞てしくしく泣出す子の恩愛に母は猶堪り兼てぞ泣出すお次ぎに聞居る兩人の老女も俱々貰ひ泣泣かへて進み出ト此内勝姫子役愁ひのこなしよろしく下手襖を明け以前の村尾鯖江兩人出て來りよろしく住居(村)御臺様には御佛間に(鯖)いらせられ升てムリ升か「こなたの泪押隠し(勝)ヲ、兩人かよふ來やつたまさかの時よいそち達おも自害をさせねばならぬ故氣の毒でなり升せぬ(村)なんの左様を御心配が入ものでムリ升ふ君へ仕へる身の上のまさかの時の一命を捧げ升るが覺悟故少しもいとムリ升せぬ(鯖)只あいたわしく存升るの御發明なる若君様お年の行かぬ御身よて叛逆謀反の名を取り給ひ〇「わたらお家をむざくど斷絶させる残念さ夫斗りが私は心残でムリ升(村)ヲ、お道理じや鯖江様それもよしなき佞人のはびこりし故起りし事〇「我君様御流罪とあらせ給ひて御守りの其御難義はいか斗り夫と申も御加増の御手遠より御心乱れケ様な事よも成行升れば恐れ多ひが私しは神君様を恨み升「女子同士の愚痴多く果し泪お暮しければ御臺の心願まして(勝)イヤ泣て居る所でない今おも御上使來りおは千悔なすとも歸らぬ事(村)只今の内隣國へ味方を頼む御手配り(鯖)夫も時世に隨へば容易な事では請引まじ(勝)夫も氣遣ひ(兩人)お家も氣遣ひ(勝)頼少なき(三人)成行じやナア「又もなげきにトもなしく愁ひの思

入れよろしく床の送りにて道具廻る

四十六

本舞臺一面の平舞臺正面上下三方共折廻し大形の襖真中に書院火鉢あり爰に以前の大六作
十郎袴形にて住居視箱を扣へ兩人共書置をして居る床の送りにて道具止る

「しづみける詰所の間みは大六と作十郎が身の詫を筆に殘て命毛を捨る覺悟の切紙や巻納
めてぞうなづきて」此内文句の通り宜敷有て合方になり(大六)イヤ何作十郎殿兼て御身と
江戸表を發足いたす其折より申合せしかの一義よもや御異變するまいナ(作十郎)改りたる
其御念いかで異變のあるべきやお供致せし我君が流罪と成なり遊して何安閑と兩人が生長
らへる所存はなし(大)事の次第を國許へ注進なせし其上は最早此世に用事なし(作)御臺
様への申辭又兩親への言譯も筆に殘して認むれば(大)御用意よくば(作)イヤ(兩人)イヤ
イヤイヤと兩人諸肌ぬぎ刀拔手も早是迄既にあわやと見へたる所ト兩人ハ覺悟休茲
へ上手より以前的美濃守下手より主馬出て双方をあわて止め(美)コリマ兩人共早まるナ
(主)切腹なすべき所でないぞ(大)ヤ左いふの父上(作)た二人りさま(美)あの爰な(兩人)う
るたへものめは是より合方きつぱりとなり(美)此度殿様御流罪と御所刑極御供よ加わる身
を以て存命すは主君へ不忠と心得て殉死と覺悟致せしは忠義に似て忠義にあらず御臺所
や幼君には御無念に思召れ御籠城との思し立御尤もとは申せ共今泰平の御世なるに將軍家
へ敵對なし國家をさわかす是逆賊と謀申は當然なれど女義と侮り我々が主君の御無念余所

に見て命惜さし將軍へ諂ふなんぞと思れんも歎かわしく存する故兎にも角にも一命は君へ
捧げし臣下の身よしなき事と知りながら其意に任せ御加担なしとりされど小栗美濃どのや
斯くいふ主馬が幼君の御傍に附添居りあから下萬民のなげきも思わす返逆謀反の籠城に荷
担なしといわれてハ將軍への恐れあり父に代つてそち達が防禦の手配り指揮なして御臺
所や幼君の御力となり必死を極め所詮傾く御武運おすは落城に至りまば其時こそは潔く討
死致シお二々方の冥府の御供仕れ血氣にはやり一命を只今捨るハ犬死同然早まる場所での
有するぞ「理をさとしたる父と父同じ心で死を止め異見の詞有難きト是よて大六作十郎理
伏したるこなしよて(大)ハノ其御教訓に預る上は(作)仰せに隨ひ死を止るで(兩人)ムリ升
ふ(美)合点が參らば刀を納めい「刀も元の鞘と鞘肌押入るハ其折からト橋縣りより以前の
豊後長門出て來り(豊)ハッ御重役へ申上升關東よりの御使ひとして(長)南幸坊天海殿大久
保彦左衛門殿(豊)當城内へ(長)來られ升と「知らせにこなたわ不審のまゆ(美)關東より
の御上使ハ老中新役内藤どのと先刻われハ承知せしが(主)思掛なき天海僧正大久保どの
ハ入來とい(大)是にハ何か仔細有て(作)將軍家よりの御内意ならん(豊)至つて身輕な出立
にて(長)供をも連れず只二人(豊)參れ升て(兩人)ムリ升(美)何は格別御兩所おハ御使者兩
人のがもてなしの(主)御用意有て虎の間みて鹿末なき様心懸られよ(豊)委細承知(兩人)仕
り升る「兩士の次へ立て行く跡に小栗は夫となく萩田と共打うなづきト豊後長門橋ガ、り

四十七

へは入る(美)大六始め作十郎殿の御臺所と幼君へ(主)此趣きを申上げ御上使受を御進め申せ(大)心得升て(兩人)ムリ升ト兩人上手へは入る「追立やりて兩人がかたへの書置手も取上封じ押切讀内も親の恩愛徳氣なる忝同士の心体もせき來る胸を押慎めト此内兩人書置を開き見て思入有て氣をウへ(美)イヤ何主馬どの今日斗らす天海殿と大久ぼどの、御入來はコリ御扱でムらふか(主)イヤくは是は籠城など家中の動亂鎮める爲さとの役に参りしならん(美)申まではムらねどいよく御家改易にて主家の滅亡する期に至らば(主)仮令大久保天海たり共何其まゝに歸さんや構となして楯籠らん(美)又寛典の御所置にて三分の一か半地にて御家の立し其時は(主)籠城の沙汰有之しは我々共が不調法制し届かぬ故なりと罪科を互ひの身に引うけ(主)一命捨て忝にて(美)家督を願ふ(主)是願道(美)ム、通れお覺悟(主)貴殿も御同意(美)御身も御同意(主)ハテかふも所存の(兩人)似るものか「直ぐお忠義の曲りあき道の一ト筋其末ハト兩人扇子にて腹を切らふといふこなしにて顔見合せ(美)ム、(主)ハ、(兩人)ム、ハ、……ト笑ふ事よろしく「覺悟の体ぞト床の送り時斗の音にて道具廻る

本舞臺四間通し常足の二重上段の蹴込み正面上下三方共金地へ竹に虎を畫し襖向ふ正面東西水引打返し襷欄間おなり都て御殿虎の間の模様平舞臺上手より以前の天海彦左衛門下手に豊後長門扣へ居る此もよふ時計の音にて道具納る

(彦)當家の御臺勝姫殿や幼年の仙千代殿の未だ是へ出さつしやらぬが將軍家々の使ひなるに出迎ひせぬの無禮でムらふ(豊)只今御兩使御乗込に相成し由奥向きへ申達せば(長)程おく是へ参られ升ふが何を申も賢直公流罪と聞し召され御落涙の止るひまもなく(豊)持病の支へて惱み居ればお出迎ひの義も思わぬ遅刻(長)失禮勝の幾重にも御用捨願ひ(兩人)奉り升る(天)其義もさこそと推察致すが只今打しの未の下刻余り時刻が押移れば成丈いそいで計らわれよ(豊)委細承知(兩人)仕り升ト此時奥にて(勝)關東よりのお使者とあれば只今御面會致す有ふ「聲かきまくも天が下賢き君の御姉に渡らせ給ふ勝姫君切君伴ひ奥殿を老女腰元引運て立出給ふ御粧ト是へ鳴物をあしらひ正面襖を引抜後奥殿の遠見にあり以前の勝姫仙千代をつれ村尾鯖江とし元六人附て出て貳重へよろしく居並ぶ「大久保夫と打見やり(彦)ヤア將軍家よりの使者よ向ひ上段の間の出迎ひの近頃以て無禮でムらふ(すつけりい)つて詞を和らげトサス様申のが紋切形だが此彦左衛門の役目を笠に力み散すの嫌でムる申さば御先祖尊靈がべてんにかけて大坂城を蹂躙させた加増の手違百万石の當が外れ賢直公には御乱行夫ヤ早剛氣の大將ゆへ御尤と思へども此彦左にいませるとソリヤお心が狭いといふもの百万石の愚な事米一粒の御加増なくとも天下の御家門賢直公日本國中誰有て鹿略も致すものあらんや夫を僅かな手違より民百姓を苦しめ給ひ暴行に募せ給ふの國家の乱を招くの基ひ既に此度御流罪極り内藤修理之進へ殿命が下りしを是なる天海大付正と此彦

左が登城なし將軍家をお諫め申半地國換とまでござ付てお伺ふ參つてゐる籠城するの殉死のど左様を野暮を申されずそこらで勘辨致されい「理非明白に大久保が噓す詞お主従は有難泪顔見合せ安堵の思ひぞ道理なる御臺も泪を浮め給ひト此内皆々よろしく思入れ(勝)スリヤ御兩使のね扱ひよて既に當家が改易も及ひ升るを半地よて國がへ仰せ付られ升とナ(天)賢直殿の流罪の儀もどふがな赦免に相成様詞をつくして見升たが何を申も賢直公よしなき所行召れし故其扱ひの届き難く是も是非なき次第なりとわきらめらるゝがよふもぞ(勝)其お詞を承り何故不足と思ひ升ふや仮令半地は愚な事僅かなりとも此家が立升事に至り升れば將軍家へ敵對升る心は毛頭ムり升せぬ遠路のお使ひ御兩所とも御苦勞至極にムり井仙千代にもお受をしや(仙)有難く心得升(豐)斯くお扱ひの趣きを(長)承りし上らら(村)家中一同打悦(鯖)安堵の思ひを(四人)致し升「折から次の一ト間より諸士のめんく進み出ト下々以前の大六作十郎先お諸士六人いづれも上下あて出て來り下お居て(大)ハッ委細お次で承り(作)お家の納り如何斗りか(一)恐悦至極に(みな)存じ升「平伏なすを見渡してト天海思入有て(天)見れば今日此席に當家の長臣美濃守まつた二老の荻田主馬見へられぬが病氣なるか「尋る折しも襖越しト上下襖の内にて(美)アィア御兩使さまへ遅刻ながら(主)御挨拶致すでムらふ「互ひに首桶たづさへて立出る様子常ならず遙か下つて平伏す彦左衛門の夫と見てト此内上手が美濃守下手より主馬いづれも上下にて首桶を抱へ苦

痛を隠すこなしにて出て平伏なす彦左衛門此体を見て(彦)ハッ心得ぬ病中なるかは存せぬと二人の家老其舉動もしや切腹召されはせぬか(美)御賢察の如く切腹致し(主)將軍家への申譯け(皆々)ヤ——「腹帯しつかと直しト家老兩人懐ろへ手を入れ腹帯を直す思入是より笹の入シ床の合方よなり(美)百万石の御墨附茶入にかへて賜わらぬは深き御賢慮ある事にて世を泰平に治めんと神君の御計ひ夫を御當家賢直公に御無念に思召され御乱行も募らせぬひよりらぬ風説是あるを老臣たる身の一命に代へて諫めぬかと江戸表にても我々を不忠と嘲り不義とよび定めて御誹謗ありつらんが是まで多くの臣下のもの數度御諫言申上或の御暇其善惡を糺さんにも我は信州高嶋なる陣屋を預る身の上に諫を入れる暇なく仇に月日を迢せし残念(主)又拙者義は先頃まで江戸詰の役仰せ付られ自國に有て國政の邪曲を調る事ならず夫と申も佞臣たる厚木九郎兵衛野元左源太其外一味の佞臣ども殿へ淫酒を進めし上已れが榮耀を極めんと斗りし故に我々を國遠さする底工みあたたら明智の我君も惡人共のてだてに陥り追々募る御乱行見るに忍びず重役たる關根彌左衛門といへるもの身分に代へて惡人等を計て立退候故無明の夢の覺給ひ今迄募る御乱行もあすは誠の御行跡正しき君になり給へば御家安体此上なし(美)臣等一同悦びの眉を開きし甲斐も早く早此度の義に至り(主)思へば老臣有ながら彌左衛門に先を越され其餘のものは腰板武士(美)是も上越めやまりあし(主)切腹致して申譯(美)不忠の死首江戸表へ(主)御持參有て何事も(美)御

赦罪頼ひ(主)奉り升一身をくやみたる申譯聞に御臺も幼君も並居る家中一同にしめる泪の袖の露大久保はたを感じ入りト此内皆々思入よろしく(彦)其關根彌左衛門事我邸宅へ尋ね來て御身等二人に落度なき事竊かに告て福井家の無事の扱ひ頼みし故夫なる天海大僧正を相使に頼み此斗らひ頓て關根は此彦左が當家へ歸參を致さすれば必ず心配無用に召され(美)スリヤ此度の御扱も(主)忠臣關根が歎頼なりしか(勝)行衛知れずにありたるも(村)流涙の憂も厭わすして(鯖)影の忠義を御盡しある(豊)世にも稀なる大忠臣(長)いづくにひそみ居らるゝとも(大)尋ね出して歸參義を(作)取計らわねば相成らぬ「さしも名家に忠臣の世にあらわれし悦びも御臺は泪おくれ給ひ(勝)ハハ適れなる忠義のめん」既又當家も改易と覺悟極めし籠城も關根が忠義も御兩使の御扱ひといひ又候や老臣二人が一命を捨て家の瑕瑾を取繕ひ無事の納り計ふは揃ひも揃ひし誠忠義心若く代つて自分より厚く禮を述べ升そ「手を下給へば兩家老勿体なしと願をふり(美)其挨拶勿体なし元々此身は我君へ捧る命惜からず(主)御馬前にての討死を思へば心いさましく(美)宜府へ出立仕る(彦)レテ又名家の兩家老跡目の頼ひはどふじや」(美)夫ど是なる忤大六(主)席に連なる作十郎(美)何卒よしきに跡目の義を(彦)其義は彦左承知致した(天)かゝる忠義の面々當家に揃ひ居からは此末御家は萬代不易いづれ當城國がへも辨理よろしき越路の内よしなみ拙僧斗らわん(勝)何卒よしなに御執成偏に願ひ上升る(美)イヤ」首級を御兩使様へ(彦)イヤ首級の土

産は好もしがらず切腹たしかに見届た(大)メリヤ此まゝに(作)御歸國あるとナ(天)跡戀ろに吊われよ(豊)テモ有き御使者の御情け(長)御恩は忘却仕り升せぬ(勝)思へばあたら忠臣を(村)かゝる御最期させ升るは(鯖)テモあいとしい此お名残り(仙)ぢいよ心残さず死で呉いよ(美主)ハ、ハッ「口にいわねど主従が是ぞ三世のあいとまに傍に二人の子は親に一世の別れ暇乞大久保わざと勇みを付けト此内みあ」思入よろしく(彦)承れば勝姫には舞に緞練召されし由申さば目出度出立故祝ふて一さし所望致す(勝)コハ折角の御所望なから二人の手負の手前と申し此義は御免被下れ升し(美)イヤ愚臣等も此世の思ひ出(主)拙き淫曲御聞に入たし(天)コリヤ面白ひ二人が詞是非に一さし御立下され(勝)左様なれば不束ながら(彦)イヤ」所望(彦)致し升るぞト是より下座の次第になり勝姫扇を持って前へ出る美濃と主馬は苦痛のこかしをこらへる思入にて(美)カタイ君が代は千代に八千代あざいれ石の(主)カタイ殿となりて昔のむすまで松の葉色も當監山ト是より地へどり下座の頃にて勝姫宜敷有て(彦)天)目出度出立つ(勝)御兩使御苦勞(彦)天)さらば(皆々)おさらば「無常を隠す別路や門出」祝して舞納むト天海彦左衛門は下手へ行美濃守主馬は是を見送りうつどりとなる村尾鰻江愁ひの思入勝姫と舞ながら愁をかくす思入れト下座に居て兩使を見送る此引張りよろしく段切にて幕

明治二十七年九月十八日
同 年 今 月 廿一日
版權興行權所有
發行

著作
兼發行人

東京市淺草區馬道町貳丁目十二番地

竹 柴 金 作

印刷人

東京市京橋區新肴町八番地

酒 依 昌 知

同

印行所

酒 依 活 版 所

（定價八錢）